



## 英語学習は平和学習

医療関係者は常に理論を学び、最新の技術を身に付けることを求められます。研修や講習会では、講師が日本人ではない場合もあります。大分市内の整形外科で働く理学療法士は、ギリシア人講師から、「ここに来る前に英語を学べ」と言われたこともあるそうです。最高の資格は、TOEICで920点以上の実力がないと取得できないそうです。

幼なじみの親友は商船大学卒業後、船乗りになりました。エンジニアとしてヨーロッパ諸国に行き来しましたが、片言の英語でも困らなかったそうです。しかし2000年以降様子は激変、日本人乗組員は大幅に減少、指導者の立場になった頃にはアジア系の船員ばかり。業務はもちろん、日常生活では、意思の疎通にたいへんな苦労をしたと言います。言葉が通じないと、少なからず疎外感を感じ、人間関係がぎくしゃくしたものになってしまうおそれがあります。

ホームステイをしながらテキサスの語学学校に通った39才の男性の話を聞きました。2年後に本格的に渡米して、夢に挑戦しようと燃えています。高校中退の彼は、ほとんど英語を使えません。語学学校には、日常の英会話ならできる世界各地の若者ばかり。何をやる時も「ゴメンネ」が口癖の彼に、日本人はいつも謝ってばかり、と周囲は笑ったり馬鹿にしたり。次第に卑屈になり、腹の立つことも多くなっていったと言います。



上記3例に共通するのは、英語の有用感と英語を学ぶことに対する逼迫感(ひっぱくかん)が欠けていたことです。英語を身に付けることは、入試の必須教科から意思疎通に欠かせない手段へと変化し、今では平和へと続く重要アイテムへと昇格

したのです。かつて植民地支配された国は母国語を奪われ、英語そのものが人命を脅かした歴史があります。それとはまた違った、平和に対する価値観を英語学習に見い出さなければなりません。

都会に行くほど、コンビニ店員やホテル従業員は外国人。みどりの窓口で切符を求める外国人観光客に英語で対応する職員。USJのアトラクション受付最前線は英会話が必須。前述のテキサス留学の男性が語学学校で先生から最高にほめられたことがひとつ。自分の考え、日本で起きていること、原発事故や沖縄基地問題や日韓関係のことを自分にできる限りの英語で表現したこと。



私達は、激動の時代における英語習得について真剣に考え、実践していかなければなりません。世界と共に生きる日本人として、小学校から英語を学び、中高で伸ばし、大学・社会へと繋がる。刻々と変化する時代の中で、絶えず興味関心を持ち続け、生涯に渡り喜びを味わいながら学び続ける姿勢を身に付けることが必要です。そのためには、高度な英語力獲得だけが目的ではなく、教養を身に付け、広い世界を知り、真実を見抜く力を備え、自分の信じるものを表現し、世界平和構築に向けて歩み出すことも求められるでしょう。

